真理のために闘う教会　　**黙示録 2 章 18～29 節**

本日のメッセージの題は「真理のために闘う教会」です。真理のために闘うと言われると少し抽象的な感じを持たれると思います。イエス・キリストはご自身のことを「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」ヨハネ 14:6 とおっしゃいました。わたしが真理なんだと。ですから真理のために闘うとは主イエス・キリストのために闘うと言い換えることが出来ます。私たちは誰でも種類は異なりますが人生山あり谷ありで様々な試練の中を通ります。ただ過去を振り返ってみて、信仰生活や奉仕において主イエス・キリストのために闘う、あるいは犠牲を払って試練を経験したことにはどんなことがあるでしょうか？ 試練にもいろいろとあります。まず自分の弱さや愚かさのゆえに受ける試練があります。例えば暴飲暴食、夜更かしを続けていて身体を壊したら辛いですが自らが責任を取る必要があります。また自分は何も悪くないのに受ける様々な試練があります。自然災害や病気はこれにあたります。もちろんそれらに対しても信仰によって祈り、問題に向き合ってゆく必要があります。しかしこれらは主イエス・キリストのために払う犠牲というものとは違います。ピリピ 1:29 に「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです」とあります。避けたり、無視したりすることは出来るけれども敢えてイエス・キリストのために犠牲を払おうとすることや奉仕を捧げるということです。それは信仰者一人一人の主イエスへの献身とも言えます。キリスト教会はこの主イエスへの献身的な奉仕によって今まで保たれてきました。そしてこれからも主イエスへの献身的な奉仕によって進められてゆきます。あなたはキリストのためにどのような犠牲を払おうとしているのでしょうか？　今日はティアティラの教会の姿を通して真理のために闘って生きること、キリストのために闘って生きるとはどういうことかを考えたいと思います。

1)キリストからの賞賛

まずキリストは、ティアティラの教会に「燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子」(18 節)という姿で現われています。黙示録には様々な比喩表現が出てきますがここもそうです。「燃える炎のような目」は、キリストが「人の思いと心を探る」お方であることを示しています (23 節)。七つの教会へのメッセージのどれにも「わたしは…知っている」という言葉があるように、キリストは、教会を見守り、その信仰と行いを知っていてくださいます。

キリストはその目をもってティアティラ教会の隠れた良い行いを見て褒めてくださいました。19 節に「わたしは、あなたの行い、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。また、初めの行いにまさる、近ごろの行いも知っている。」とあります。「近ごろの行いが初めの行いにまさっている」というのは素晴らしいことです。ティアティラ教会は決して大きな教会ではありませんでした。その成長は目を見張るようなものではなかったかも知れません。しかし、どんなに小さな試みやチャレンジであっても、それは前に向かうもの、上に向かうものでした。キリストは教会をその大きさや力で評価されるのでなく、その内面がどれだけ成長しているかでご覧になるのです。個人の場合も同じです。信仰を持った時から五年、十年と年を重ねるごとに、あるときは深く根を張り、あるときは枝を伸ばし、霊的に成長していくことをキリストは期待しておられます。たとえそれがゆっくりとした歩みであったとしても、キリストはそれを見守ってくださいます。キリストがその温かいまなざしを教会に注ぎ、その霊的成長を褒め、励ましてくださるというのはなんという慰めでしょうか。

2)キリストからの叱責

キリストからのお褒めのことばの次に叱責のことばがあります。地上の教会は、ここまで成長したらもう大丈夫、あとはのんびり楽しく過ごしましょうというわけには行きません。教会は常に自らの罪と世の悪と格闘している「闘う教会」であり、天を目指す「途上の教会」です。途上は英語で OnTheWay となります。ご存じのように月報の名前はそこから来ています。どんなに立派な教会でも、「愛、信仰、奉仕、

忍耐」のすべてにおいて完璧な教会はありません。どこかに欠けがあり、弱さがあり、足りなさがあります。ティアティラの教会は、「信仰の真理」を守ることにおいて弱い面があり、間違った教えが教会の中に広がるのを許していました。

ここでは、「イゼベル」と呼ばれている偽預言者とその教えに従っている者のふるまいと彼らへの裁きが書かれています。ただこの偽預言者は「イゼベル」と呼ばれているからといって、女性とはかぎりません。例えば「教会」は、ギリシャ語では女性名詞なので、代名詞では「彼女」と呼ばれます。国、国家も、女性扱いされ、国のことを「彼女」と呼んだりされます。教会は「キリストの花嫁」であり、「信仰者の母」と呼ばれてきました。ですからキリストへの献身を誓い、信徒を養う教会に対して、キリストに逆らい、信徒を食い物にする存在が旧約の悪女「イゼベル」の名で呼ばれているのです。

イゼベルがどれほどの悪女であったかは、列王記第一 16 章から列王記第二 9 章にかけて書かれています。イゼベルはシドンの王女でしたが、イスラエルの王アハブに嫁ぎました。王妃となったわけです。その時、自分の国の神バアルをイスラエルに持ち込み、バアル（偶像）崇拝を盛んにしました。そして主の預言者を次々に迫害し殺したのです。(列王記第一 18:4）アハブ王には気弱なところがあって、実際に王宮を動かしていたのはイゼベルだったようです。いわゆる「カカア天下」ですね。こんなこともありました。あるとき、アハブ王が自分の王宮の隣にあるナボテの畑を欲しくなり、それを買おうとしました。しかし地主ナボテがそれを拒否したため、アハブ王はたいへん不機嫌になりました。イゼベルがなぜ不機嫌なのかと王に尋ねたところ、王は事情を話しました。すると、イゼベルは、「神と王を呪った」という罪, 濡れ衣をナボテに着せ、ナボテを殺して、その畑をアハブ王のものにしてしまいました。その時のイゼベルのことを聖書はこう書いています。「アハブのように、自らを裏切って主の目に悪であることを行った者は、だれもいなかった。彼の妻イゼベルが彼をそそのかしたのである。」（列王記第一 21:25）その後、イゼベルはアハブ王が死んで息子のヨラムが王になったときも、王の母として権力をふるいました。ティアティラにいた偽預言者は、このイゼベルのように、狡猾で強引な方法で、教会を荒らしていたのです。「女と姦淫を行う者」(22 節）というのは、キリストへの忠誠を捨て、イゼベルの教えを受け入れている人々のことです。「この女の子どもたち」(23 節）というのは、この分派の指導者や後継者たちのことで、旧約の時代に、イゼベルが裁かれたように、彼らにもキリストの裁きが降るのです。

偽預言者イゼベルの教えを受け入れるさいに、教会のバプテスマ（洗礼式）に相当するなんらかの儀式があったようです。「サタンの深み」(24 節）と呼ばれているのは、そのことだろうと思われます。この教えに影響されても、最終的にはそれに加わらなかった信徒に、キリストは特別な要求は何もなさいませんでした。「ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい」(25 節）とだけ言っておられます。伝えられた真理をしっかりと保っていること、主はそれを教会に求めました。彼らと目に見える形でも戦って追い出したり、逆に彼らを迫害しなさいとは言われていません。むしろ悔い改めない者にたいする罰は私が与えると言われています。教会を惑わし、破壊し、踏みにじろうとする者を、キリストはその「真鍮の足」で踏みつけられます。それと共に、キリストは信じる者にも真理に堅く立つ「真鍮の足」を持つようにと教えておられるのです。

3)私たちの足備え

ティアティラの教会が間違った教えに惑わされたようなことは、その後の教会の歴史に何度もありました。同じことは今もあります。地上の教会は真理のために闘う、主の軍勢であり、信仰者は、その兵士です。以前学びましたがエペソ 6:14 – 15 には、「霊の戦い」のための「神の武具」が記されています。「腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。」私たちはこうしたもので身支度をしている必要があります。「平和の福音の備えをはく」とは、「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」（ローマ 10:15）とある言葉を思い起こさせます。「足に福音を

履く」というのは、伝令を伝える兵士のように福音を人に伝え知らせることを指しています。

そして同時に、「足に福音を履く」というのは、福音を伝える前に、私たちが福音を信じ、理解し、福音に生きることも意味しています。履物は歩いたり、走ったりするために必要なもので、聖書では信仰の生活が「歩くこと」や「走ること」に譬えられています。ですから、「福音を履く」というのは、私たちが「福音にふさしく生活する」（ピリピ 1:27）ことでもあるのです。もし、私たちの生活が口で言うこととあまりに違っていたら、それは「福音を生きている」「福音にふさわしく生活している」ことにはなりません。私たちは、福音を、言葉だけでなく、日々の歩みによっても語る者でありたいと思います。

ローマの兵士は、戦場では、戦場用のサンダルを履きました。サンダルでは十分に足を守れないのではと思います。しかし、川を渡るときなどは、靴よりもサンダルのほうが、水が溜まらないので、敏捷に動き回ることができて、かえってよいのだそうです。陸上のトラック競技の選手が「理想的な靴とは軽くて自分の足の一部かと思えるほどフィットしているものです。」と聞いたことがありますが自分のサンダルがピッタリと足につくように、福音が私たちのあらゆる行動を導くものになるとき、私たちは、霊の戦いにおいて、真理を守り通すことができるようになります。逆にいくら高価な靴であっても、時々履くようであればいつまで経っても足に馴染まずかえって靴ズレを起こして苦痛となるかもしれませんね。

現代ほど、私たちを真理から引き離そうとする力が強く働いている時代はありません。「イゼベルの子ら。」彼らは起こっては消え、消えては起こり、私たちを誘惑しています。しかし、キリストは、すべての偽りを見破り、それを真鍮の足で踏みにじってくださいます。ですから私たちのすべきことはキリストのために何かをすることよりも、自らのうちに福音の真理を保って生きること、キリストと共に生きるということになります。「燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子」――このキリストから目を離さず、このお方によって、真理に立ち続けましょう。